和名倉百年の森

wanagura hyakunen no mori　NPO法人百年の森づくりの会

2016 10.1 32号

巻頭言……1 ／ 総会・記念講演会……2－5 ／ ニシンの復活にかけた人生・牧野健一……6－8 ／
和名倉山森づくり報告……9－10 ／ 長瀞町宝登山下刈り活動報告……11 ／
平成28年度　第9回通常総会開催……11

『森聞き』の映画

理事長　小林公彦

百年の森づくりの会の高岡正彦副理事長はいずみ高校生に秩父の三峰山で植林活動や下草刈りを通し、森の大切さを教えています。また、小室正人常務理事は、杉戸農業高校生に長瀞宝登山で下草刈りなど体験学習の指導をしています。

高校生は「森づくり」について、どのように思っているのでしょうか。

二〇一一年に公開された、柴田昌平監督の「森聞き」というドキュメンタリー映画を見る機会がありました。この映画は、二〇〇二年から林野庁などが主催で毎年「森の聞き書き甲子園」として、高校生百人がそれぞれの名人を訪ね、名人の知恵や技術、ものの考え方や人となりを記録に残し、未来に継承する目的で実施している活動の一部を映画化したものです。

「森聞き」は四人の高校生がそれぞれ日本各地の山村に暮らす「森の名人」と呼ばれる老人を訪ね、その時の体験を映像化した作品です。

大学進学を目指している東京の高校生は、富山県五箇村の合掌造りの八十二歳の茅葺き名人を訪ねます。茅葺きの材料となるカリヤスを三〇度もある急斜面の焼き畑の場所に種を播いて育てています。名人は「険しい斜面で育てたカリヤスは丈夫で長持ちする。いいカリヤスが採れる。」と言います。種から育てたカリヤスを刈りだし、大勢の人の技術を結集して作り上げるのが茅葺きの仕事だと言います。

山深い地域で暮らすマンガ好きな三重県の高校生は、奈良県のロープ一本で「カルコ登り」という伝統的な技を使い、杉の大木に上り、四〇m先の枝になる良質な杉の種を採取する七十六歳の名人を訪ねます。名人は「三百年先の子孫たちの時代へ豊かな森を残す責任がある。良種を採取するための「カルコ登り」の技を引き継ぐ後継者がいない。」と言います。

進学校で寮生活をする宮崎県の高校生は、椎葉村で焼き畑農業をして暮らす八十五歳の名人を訪ねます。焼き畑は森を切り開き、四〇度もある斜面で、一年目はソバ、二年目はヒエやアワ、三年目は小豆、四年目は大豆を作り、二十年後にはまた森に戻すのだそうです。

高校生は「焼き畑が好きなのですか」と素朴な質問をします。名人は「好き嫌いじゃない。生きていくためだ。自分の一生の仕事として、縄文から続くソバの種をきらしてはいけないからだ。出来たものに感謝して、また作るということだ。」と言います。

家の農業を手伝う北海道の高校生は、北海道檜山地区の木こり名人を訪ねます。老人は、厳しい北海道の雪山でヒバを伐り出し、雪を利用して材木を運び出す技や水を溜め、ダムをつくり、一挙に流出させた水の勢いで木材を下流に運ぶ技の名人です。

高校生は、木材に傷つけずに木を倒す方法や作用点（力点、支点）を見極め、大きな材木を動かす方法を名人から学びます。

名人は、「山は反省する時間を与えてくれる。山の空間を歩くと自由人になれる。宇宙人みたいだ。頭の中はきれいなもんだ。あなたも目標をもって元気でやればいい。何か行き詰ったら、もう一回くればいい。」と言います。

その後、四人の高校生は未来に向かってそれぞれの道を進んでいますが、北海道の高校生は林業の道に進んだそうです。

この映画は、結論があるという映画ではありません。私は、四人の名人が「種を受け継ぎ、育てる大切さ」を語っているように思いました。そして、それぞれの環境の中で知恵や技術を創出して、一生懸命生きている生き様を感じました。最近、高校生など若者の犯罪が新聞を賑わせており、危惧しておりますが、高校生は正に「世界そして日本の未来を担う種」です。

「百年の森づくりの会」は植林活動のほか、「森の大切さ」を啓蒙する活動をしています。名人が自然と共生し森を育てているように、我々も次世代を担う高校生が森との関わりを持ち、森づくりの大切さを知ってもらうような活動を進めていきたいと思います。会員の皆様も一緒に活動していただければありがたいと思います。

平成28年度 第9回通常総会・記念講演会　平成28年6月5日

『秩父の自然を知ろう ～秩父山地とニホンオオカミ～』

野外調査研究所理事長　吉川國男

私の専門は考古学であります。現職のときは、文化財の保護や荒川の調査という仕事をしておりました。今日のテーマは、百年の森づくりの会の要望を受けて、私の専門を絞って「秩父の自然―秩父の山地とニホンオオカミ」という事で、お話させていただくことにしました。

1 荒川源流を遡る

三峰口～落合～川又

荒川の源流点は、甲武信ケ岳にあります。荒川は埼玉の山地から流れ出て、東京湾へ173㎞の長さがあります。荒川流域には950万人が住むという大変大きな川です。

埼玉県が、昭和58年から63年にかけ、荒川の総合調査を実施しました。私は、その調査に従事した昭和60年の夏、荒川の源流点を探るため、「真の沢」の沢登りをした経験があります。真の沢まで行くには、秩父山地と盆地の境目にある三峰口まで秩父鉄道で行き、そのあと、かつてケーブルカーの起点の大輪を通り、左には神庭洞窟があります。ここは私も発掘した旧石器から縄文の洞窟遺跡です。河岸段丘があるのも、ここから少し奥に行った落合・鵜(うずら)平(だいら)あたりまで、右岸か左岸に平場地形が形成されています。

落合は、地名が示すように源流部の荒川と中津川の合流点です。この集落には、旧大滝村の役場（現在は秩父市役所支所）や図書館・公民館があります。そして荒川本流をせき止めた二瀬ダムを越えていくと、二瀬ダムの上流に栃本という集落があります。かつては信州、甲州への旅人の宿泊地で、江戸時代には関所がありました。この辺りからは上流方はV字状の峡谷になり、栃本から1㎞先には川又という集落があります。ここは荒川本流の中では一番奥の集落で、数軒しかありません。

川又から先、股の沢との合流点までを「入川(いりがわ)」と称し、急流の谷底には5～6m大の石があり、イワナの好釣り場です。文人の前田夕暮が昭和前期、そこで製材を行っていた場所です。前田は平らな所を見つけては森林鉄道を敷いたようです。

川又からおよそ10㎞先に行くと柳小屋があります。柳小屋は標高1200mにあり、山仕事や釣り人が利用する無人小屋です。その手前に赤沢が合流していますが、国土交通省はこの合流点を荒川の起点としています。柳小屋までは運動靴でも行けますが、その先からは山道になり、柳小屋を過ぎるとすぐ、右方から股ノ沢が合流してきます。股の沢の合流点から上を「真の沢(まわ)」と称し、荒川本流筋の最奥部です。

「真の沢」の沢登り

私たちは、朝5時ころ柳小屋をあとにして、真の沢沿いを登ってゆきました。股ノ沢沿いは、かつて金山がありました。武田信玄の頃から採掘しており、信玄が強かったのも奥秩父産の金に負うところがあったのではないでしょうか。荒川の源流地域の処々に見える小さい平場は、金の採掘・選鉱の作業跡・飯場跡とみられ、数十カ所近くあるが、これら金山遺跡の調査は、手つかず状態です。そこには鉱石を割った臼(のみ)や鑿(たがね)などの遺物が散在しています。

股ノ沢の合流点を過ぎて1㎞ほどのところに千丈の滝があります。これは荒川水系の中で一番高い滝で、高さが33mあります。千丈の滝から上は、道が断続し、沢辺りや沢の水流中を歩かざるを得ません。以前は山仕事をする道もありましたが、今はバサバサするような道になっています。

千丈の滝を通過して更に上がって行くと、不動の滝という幅広い滝があります。柳小屋から源流点との中間にあり、いっぱい倒木がひっかかってダムを作っています。真の沢の両側の斜面にも小広い平場＝金山遺跡がありました。

不動の滝を左に見て更に登ると、水流は岩盤を急・激流となってくだり、私たちは水しぶきを上げながら歩き、そして滝や滝つぼがあれば、巻き道をしませんと、上方には進めなくなります。あるテレビ局で「世界の秘境を歩く」という番組のクルーが取材に同行しましたが、このあたりでダウン。置き去りにするわけにはゆかず、カメラやロープを我々が背負わされる羽目になりました。

真の沢の沢登りは、よほどの健脚か沢登り経験の深い人でないと無理です。登山靴も通用しないので、私は、地下足袋に藁縄を巻き、滑りやすい浅い激流を、バシャバシャと用心深く歩きました。

合流点で注意しなければならないのは、2本の沢のどちらが真の沢なのか見極めることです。同じくらいの水量だと、どちらが本流なのか見分けが難しい。幸い仲間に地図を見るのが上手な者がいたので、三宝山から流れ来る支流を見遣り、辛うじて最後の合流点も通過しました。その直後、眼前に絶壁が現れ、切り立

った2㌔ぐらい隘路を通らなければ、源流点には到着できないことがわかりました。時刻は午後4時を過ぎていました。そこを通過すると、傾斜がゆるくなり、源流点「奥の二俣」にたどり着きました。そして最後は再びきつくなり、甲武信小屋まで20分の地点です。源流点は、木賊山と甲武信ケ岳から流れて来る沢の合流するところで、甲武信側の源頭は、源流点より15mほど奥にあり、想像していたようなポタリ、ポタリではなく、急傾斜する花こう岩の割れ目から毎秒2ℓほど発現するものでした。木賊山の水流は、途切れ途切れになっていました。源流点の標高は2200mで、両源頭の中央に、林野庁の許可を得て「荒川源流点」の石柱を設置しました。

2 甲武信ケ岳と荒川水源の碑

国土地理院の5万分の1の地図では、最近は甲武信岳に「ケ」を入れて甲武信ヶ岳と表記しています。この山は、深田久弥が選んだ百名山に入っていますが、地勢上きわめて重要なことは、ここに源流をもつ川が、3海に通じているということです。すなわち、甲武信ケ岳から南側に流れる川は上流部の笛吹川を経て下流部が富士川になって駿河湾に注いでいます。また、西側に流れる西沢川は千曲川から、日本一長い信濃川を経て、日本海に注いでいます。そして、ここから東に流れ出している川は、前述したように真の川から入川を経て荒川に通じ、東京湾に注いでいます。このように、三つの海に通ずる山が、ほかにあるでしょうか。このことは、秩父の地方の文化的形成にも、影響を与えていると思われます。

埼玉県では、昭和61年8月1日の水の日に、源流点碑と甲武信小屋の前庭に建てた「荒川水源の碑」の除幕式を行いました。1本の川を対象に5,000頁からなる荒川調査団の学術報告書は、世界的にみても類のないものですが、報告書をつくるだけでなく、水源碑を建てることによって水の尊さと荒川の源流点が甲武信ケ岳にあることを、多くの方々にアピールするため発案し建碑が実現しました。当日は県政始まって以来の高所で、畑県知事・笠原県議長らの出席のもと、登り合わせた100余人の参加を得て、ガスの合間をぬって短時間で行ないました。

水源の碑は2トンの重さで、甲武信小屋まで運ぶのは大変でした。石をヘリコプターで運ぶのですが、原生林だからどこへ降ろしていいのか分からない。煙を焚いたりして、上空は空気が薄く揚力が弱くなるため、空輸は難しかったのです。建碑に当たり、山中徳治氏のご指導は有難かったです。

3 秩父の位置と地形区分

地理学上、奥秩父とは三峰口から上の部分および秩父盆地の南部地域をいい、盆地の北部の旧吉田町から皆野町の赤平川の北側、群馬県へかけては上武山地いいます。秩父盆地の東側の東秩父村や小川町、都幾川町、越生町や鳩山町などは外秩父山地といいます。年代的には奥秩父よりも城峰山方面が古いといわれ、奥秩父は以前秩父古生層といわれていましたが、今では秩父中古生層と言われています。これには理由があります。以前、秩父古生層と言った時には外国ではこんな化石が出るときには中生層だと言っていました。ところが明治の古生層と名付けた時には中生層の基準化石がなかったので古生層と付けた。現在は、中生層中に古生層の砕けた岩石があるので、地質学者が中生層と古生層がでるので合わせて中古生層と呼ぶようになりました。

秩父山地は1～2億年前は太平洋の海底です。第四紀の数百万年前から一千万年の間に、だんだんともち上がって山地になりました。ですから山の中から化石が出てもおかしくない。太平洋に積もった堆積岩が少しずつせり上がったということです。荒川の源流部では火成岩もあります。甲武信ケ岳や木賊山にはマグマから噴出して出来ているのです。

秩父の地形は、西が高く東は低いというのはご存知だと思います。秩父山地の西側、長野県側はご存知のように緩やかです。十文字峠、甲武信ヶ岳辺りから秩父側は急峻になる。西の方は火山で出来たからです。東の方は火山でなく、せり上りだとか断層とか浸食して出来たので険しいのです。従って、文化も西の方から緩やかな道を通って来ていますから、あまり抵抗がなく取り入れられました。長野県側の信濃川上村の梓山集落が1300mの標高にあり、米も作っています。それに対して荒川流域は甲武信国境から急傾斜で下がり、例の栃本あたりでは、600か700mまで下がっています。荒川流域の地形は構造山地で、山体はせり上がり、谷は下刻・側刻浸食が盛んで峡谷も発達中です。山の形は、これらの作用と岩石の種類によって形も変わっています。

秩父山地で一番高い山は、山梨県の北千丈ヶ岳、で高さは2601mです。埼玉県では甲武信ケ岳の北隣にある三宝山が一番高く、2483mです。甲武信ヶ岳の直ぐ北にある山です。甲武信ケ岳は埼玉では2番目で2475mです。皆さんが活動されている「百年の森づくりの会」の白石山（和名倉山）は、2036mで、奥秩父山地のそのような地形環境にあるのでしょうか。地表は、直ぐに岩石ではなくて、表層に土があり、その下数十㎝か数mに岩盤があります。

秩父盆地は、新生代第三紀（約1500万年前に陥没して形成された海底であり、その周りは古い年代に出来た地層がせりあがってできた地層です。

秩父の経緯上の大体の位置は、北緯36度、東経139度で、その交点は小鹿野町にあります。覚えておくと比較するのに良いかと思います。

4 秩父の気候

秩父の夏の気温は、盆地が35度でも、荒川源流点では18度ぐらいです。冬場は零下10度～20度に下がります。秩父の奥の方は平均気温が、盆地よりも4～5度で寒い気候です。奥秩父の気候は変わりやすいのも特徴です。日本海側と太平洋側の境にあり、それと中部山地に背中合わせにありますので、複雑に気流が流れるため気象が変化しやすいのでしょう。

平成22年、秩父山地で大変痛ましい事故が起きました。笠取山の北斜面、ブドウ沢での三重遭難事故です。最初に7月25日、東京都の女性が滝つぼに落ち、その救出に向かった埼玉県救援隊の防災ヘリコプターが墜落し5人の救出隊員が死亡。原因は、いろんなことが言われています。メインローターであるプロペラが右の谷の縁の木をなぎ倒し、左の崖を削った跡がある。既に女性は亡くなっていました。8月1日には、この取材で日本テレビの記者二人が、翌日、滝つぼで水死体が見つかったという事件で、死因は水死です。秩父山地にとって、きわめて悲痛な三重遭難で合計8人も亡くなりました。

秩父の山は、高さは必ずしも高くはないが、厳しさがあると知っておかないといけないと思います。この墜落した場所は高い所で1800m、谷底で1400mぐらいです。2000m以下でこんなに大きな事故が起きました。この辺りは、険しい構造山地で、ブドウ沢の地形の断面は上の方は開いているが中途から急に狭く落ちている。それから高木の原生林が繁茂しています。シラビソと大シラビソとかツガが繁茂していて、地形が分かりにくいのです。だからパイロットはよっぽど注意しないといけない。その上に気候の変化があり、おそらく気流が原因だったと考えられます。高い所で揚力・浮力が弱くなります。山風・谷風、それにプロペラが起こす下への気流とかが複雑に絡まり、それに巻き込まれたのではないか。秩父山地は険しく、気候が変化しやすく、そして原生林に覆われている。要するに潜在する多様な自然の厳しさに対し、再認識の教訓を与えた事故であったと思います。

5 植物、動物

植物は、土地の高度とか気温によって生育が変わります。高さによって分布が決まっています。一番高い亜寒帯では、シラビソ、大シラビソ、コメツガ、それから冷温帯林は温帯林ブナ、イヌブナ、ミズナラ、そして600～700mあたりから下は、モミ、クリ、イヌシデが自生し、盆地の所へ行くと若干暖かい所ではスダジイがあります。関東平野はスダジイやヒサカキなどの照葉樹林・人手の加わった雑木林となります。垂直分布では、どういう種類の植物がどの高さにあるか、その植物の育ちやすい環境が分かります。

真の沢の源流の一帯の林床は、コケ類におおわれていて、柔らかい布団のように繁茂しています。

チシマネコノメは、本来なら千島にあるべき植物ですが、氷河時代の名残の植物で自生しています。それからコガネネコノメソウという珍しい植物があります。また、チチブリンドウというヒマラヤの山中にある植物も奥秩父に自生しています。

トワダカゲケラ、昔トンボの水生昆虫ですが、これも源流部に生息しています。それからリスは方々にいますが、ニイガタヤチネズミ、ヤマネは大体高さが1600m以上にいます。それからモグラだかネズミだか分からない獣がいます。よく見ますとヒミズモグラです。ホシガラスは真っ黒ではなく斑点があるカラスです。

6 ニホンオオカミの消息

その後のニホンオオカミ

秩父地方の自然の中で、絶滅したのではないかというニホンオオカミの話をテーマの中に入れたかと申しますと、秩父はニホンオオカミが沢山生息していたところなのです。日本の中でも多生地域は、紀伊半島、丹沢、福島、岩手でしたが、秩父は紀伊半島と並んで多くの二ホンオオカミが生息していました。

最後にニホンオオカミが捕獲されたのは1905年（明治38年）です。もう百年以上前です。これは奈良県の東吉野村のニホンオオカミで、現在、検体はイギリスの大英自然史博物館に所蔵されています。私も若いころからニホンオオカミを追いかけていました。

長瀞町の井戸という所で明治40年ころ、ニホンオオカミを飼っていた人がいる。動物作家の戸川幸夫さんと明石原人の発見者でオオカミの研究者の第一人者である私の恩師の直良信夫さん、そして案内された先輩の小林茂さんに連れられて、地元の大沢和恒さんの案内でオオカミを捕えたという所へ行きました。そこは、井戸集落から南方へ入った金ケ嶽の東側斜面の三ノ沢で、実際に捕まえたのは炭焼きの吉田浜吉さんだったということでした。深さは2㍍ぐらい、直径が約1㍍の穴があって、そこへオオカミが巣をつくって子育てをしていたが、親オオカミが穴から出かけた後に行って捕えてきた。吉田さんは、何とか育ててくれないかと持って行った。大沢家では和恒さんの父仁三郎さんが預かって、世話することになりましたが、その晩から約1週間、毎晩のように大沢さんの家に親オオカミがやって来て戸袋を叩いたり雨戸をこじ開けたりした。もうおっかなくて寝られなかった。朝になってみると、外にはヤマドリやノウサギが置いてあった。この話は、明治43年ころですから吉野で捕獲された時より5、6年も後のことです。

その後も時々オオカミの声を聞いた、目撃した、飼ったという体験談は、数多くあります。

フォーラムで聞いた時の話[註5]を、いくつか紹介します。飯能の人で柳内賢治という方が『幻の日本オオカミ』（さきたま出版会）という本を出しています。昭和39年、志賀坂峠に3人で行ったとき、約20m前方で「うお～」と地面をゆするような鳴き声を聞き、姿も見たことが書かれています。

私の友人の高橋光男さんの話は、昭和29年に、これは旧大滝村の千島安五郎さんが三峰山でオオカミを捕えて来て、秩父市東町のお店の裏で飼っていたのを見たという話です。小学生の高学年の時なのではっきりと覚えていて、足で踏んで食べていた。そして近づくと「うお～」と凄い音を立てていたそうです。

茂木章さんの目撃談は、1990年、和名倉山で県山岳救助隊の訓練の夜、たき火をしていた直ぐそばを、オオカミ？が通った。堂々としてにらめっこしたそうですが、同行の4人も見ていていたと、いいます。

次に上尾市の八木博さんの話は、新聞やテレビにたびたび出られる方で、1996年に名栗村の有馬谷で目撃し、写真を19枚撮られた。オオカミの特徴をよく捉え、短足で尾っぽの先に黒い毛がある。それから耳が三角で小さい。ただ首に毛が薄くなっているのが気になりますが、森田正純氏は、写真をもとに骨格などをの数値を推計解析した結果、ニホンオオカミの可能性が高いとの見解を今年発表されました。

それから2010年11月20日、アウトドア愛好家の小菅正樹さんは、飛龍山（大洞山）、高さは2000mちょっとある山頂でオオカミ？の声を聞いてから、約2時間後、オオカミに似たイヌ科の動物を3秒ほど目撃したという。また、そこから西にある大常木山でも声を聞いた。「うお～」という声だったそうです。

ニホンオオカミの特徴

オオカミの姿は特徴的なのは顔です。犬より吻鼻が長く飛び出ている。私の発掘調査で日本犬の柴犬はおでこの下に段があるのが特徴です。オオカミのおでこは、あまりしやくれていない。この段を額段といい、額段の小さいのがオオカミの特徴です。大きさは中型犬、紀州犬とか四国犬と同じぐらいです。体長さは105cmから120cm、高さは50cmぐらいです。

分類学的には食肉のイヌ科です。ニホンオオカミは世界的にみて独立し、以前は大陸オオカミの亜種ではないかと言われていました。前の国立博物館の哺乳類部長の今泉吉典さんによると、独立したオオカミでいいだろうと言っています。世界的に見てオオカミは、アジア系の大陸オオカミと新大陸のアメリカンオオカミの二つに分かれます。シーボットは、オランダのライデン博物館に剥製が届けられ、そこの館長さんが1839年、Canis lupus hodophilax TEMMINCKと命名しました。ニホンオオカミはその中で今泉さんの言われたとおり、独立種でいいだろうという事になっています。

習性は夜行性で、人の案内をする。案内をするのは犬科の特徴です。それから後をついてくる。私も皆野町で取材した時、三沢という織物で有名な所ではそこの女工さんが峠越えをした時ついて来た。でも怖くはなかった。オオカミ様が守ってくれるから、夜道であってもは怖くなかった。それが本当の送りオオカミなのです。皆さんは送りオオカミというと悪い意味で使っていませんか。濡れ衣を着せられオオカミの名誉を回復するために、払拭したいと思っています。オオカミの習性を知らない人が付けたのではないかと思っています。人の後をついて行き、集落が見えるとスーッといなくなる。何故イヌ属と同じように、人と棲まないのか。それは、猜疑心が極めて強いからです。昔は食肉しましたから、オオカミはよく見ていて最後は食べられてしまうというのを知っていたのではないか。人間の社会に飛び込まないで、遠くない所で生活してきました。いつ頃からイヌとオオカミが分かれたのかというと、2万年ぐらい前にオオカミは、進化の道をイヌの道と分かれたというのが一応定説になっています。

縄文時代のオオカミの骨が、貝塚とか洞穴から出るのです。オオカミの骨は犬に比べると出方が非常に少ない。縄文時代は狩りが盛んで、オオカミは人間とライバル関係にあった。オオカミもイノシシやウサギを食べたりする。人間も同じようなものを食べる。ところが農業をやるようになると畑をイノシシやシカに荒らされと、これらの害獣をオオカミ様が退治してくれる。今度は逆にオオカミを頼るようになったのです。

そして神様として奉るようになる。それが三峰神社とかに表れているのです。害獣から益獣へ変化しています。そして神社信仰にまでに祀られるようになったのは、火事と喧嘩は江戸の華と言われ、木造建築で火事が多かった。オオカミは火が怖いから、いち早く火事を察知する。それで火防せの神に祀られる。それから耳が良い。泥棒が来た時に教えてくれる。それで盗難よけになるわけです。

生存か絶滅かと言われている中で、もし山で仕事をしていて茶色系統の犬がいたら、オオカミと疑ってみて下さい。そうなればオオカミと遭遇する歴史的な発見になるかもしれませんので、是非そういう目で見ていただきたいと思います。以上をもちまして、「秩父の自然を知ろう」の話を終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。

（文責事務局）

特別寄稿

『ニシンの復活にかけた人生・牧野健一』

百年の森づくりの会　理事　大熊光治

北海道の日本海沿岸に厚田という村があった。現在、平成17年10月に石狩市と合併し、石狩市厚田区である。厚田区は札幌の北西の方向約50kmのところにある。厚田へ行く交通手段はバスのみで、およそ90分である。

厚田村は、作家の子母澤寛、宗教家の戸田城聖、大相撲横綱の吉葉山の出身地でもある。

昔、ニシンで栄えた村である。しかし、昭和30年をすぎてから、ニシンが獲れなくなった。村の人々はニシンが獲れなくなった原因として、ニシンの獲りすぎやニシンの作業に使うための森林の伐採などをあげている。その原因がはっきりわかないまま、時間は過ぎてしまった。ニシンが獲れなくなったことは事実である。

厚田村の復活と繁栄のために力を注いだ人物が現れる。牧野健一という人物である。昭和15年7月24日樺太の敷香町で生まれる。健一の父は秋田県出身で北海道の沿岸を渡り歩き、漁師をしていた。日本海沿岸の雄冬は豊富な漁業であった。しばらく雄冬にとどまった。或るとき、兵隊検査で厚田村を訪問した。素晴らしい漁場に感動し、厚田村で番屋、船、網を購入した。その後、健一の父は樺太へ渡り、南樺太北緯50度南方の多來加湾沿岸にある敷香町で漁師を行っていた。健一は幼いころ樺太で過ごした。海に行っては魚を獲り、潮だまりに多くのエビが集まることを知り、エビも獲った。大きなエビをたくさん獲った時、夢中になり胸にエビの殻が刺さったこともあった。

牧野家は、終戦を昭和20年8月20日町内会からの連絡で知らされた。日本へ帰ることとなった。政府の指導で母親と子供を優先して日本の北海道や本州へ帰ることとなった。牧野家は母親と長男健一、妹、弟の4人で帰ることとなり、父親は樺太に残り、様子をみて帰ることになった。

昭和20年8月22日第1便の政府の船が大泊港から出港予定であった。この船に当初乗る予定であった。敷香駅から大泊駅まで900kmある。敷香駅から列車に乗り出発したが、途中ソ連軍の進行によって列車は何度も停車し、到着予定を大幅に遅れてしまった。結局、第1便の船に乗れなかった。第1便は出港し、しばらくしてソ連の潜水艦が追跡してきて、北海道留萌沖で攻撃され姿を消した。牧野家が乗った列車は無事大泊駅に到着した。大泊港には引き揚げ者で混雑していた。家族が迷子になると困るので、母親は2人の子供を抱え、1本のひもで健一を縛り、他方を母親に結んで移動した。そして難なく第2便に乗船し、無事稚内港に入港した。稚内港は引き揚げ者でいっぱいであった。一行は母親の実家のある岩手県宮古に行った。しばらくすると父親も宮古へ来て家族は合流した。

父親は樺太を出る時、仲間とお寺の壁にかかっている天幕で船の帆を作り、夜中霧の中を川崎船（木造船）に帆を張り脱出し、荒波の中一路北海道を目指し、稚内にやっとのことで上陸した。そして家族の待つ宮古へ行き再会を果たすことができた。

北海道、樺太の漁場を見てきた健一の父は、今後家族で生活するのに適したところを考えた。幸い、健一の父は、樺太へ行く前に厚田村に番屋を買ってあった。魚が豊富で家族で過ごすのに最適な厚田村に移住した。

牧野健一は、厚田村立厚田小学校、厚田村立厚田中学校を卒業すると、札幌工業高校機械科へ進路選択をした。工業高校は人気もあり、最もレベルの高い学科であった。健一の父は、健一にこれからは漁師にならずに高校へ行き広く勉強するように勧めた。

牧野健一は、札幌工業高校機械科高校を卒業し、厚田村役場に就職する。役場では教育次長、産業振興課

長、総務課長の要職を務める。

牧野家は漁師であり、厚田の海が見渡せる厚田村の別狩に住んだ。厚田村の別狩、小谷、青島の日本海は豊かな藻場もあり、魚やカニが豊富に獲れたところであった。別狩、小谷、青島は丘陵地が広がり、原生林で覆われていた。原生林からの湧き水は中島南の沢川、中島北の沢川、石沢の沢川、菊池の沢川に流れて日本海に流れ込んでいる。この丘陵地の原生林は魚付林の役目で素晴らしい林であった。別狩、小谷、青島の丘陵地は原生林で長い期間をかけて自然が作った持続可能な森林であった。林の中にはエゾユキウサギ、エゾシカなど多くの動物も生息していた。牧野は子供の頃、林の中でエゾユキウサギを追っていた。

昭和58年、この地に国営による草地改良が施され、酪農放牧が行われることとなった。原生林は切られることになった。牧野は、この地は山や谷で起伏が多くあり、牧草地として適さないと思っていた。しかし、この地に牛を飼うことが本格化した。地主たちは協力し、土地を牧草地にすることになった。厚田の東に位置する発足地区で山の奥に住んでいる人々は、牛の餌としてのデントコーン（トウモロコシの一種で、固いトウモロコシ）の作付けも始まった。運営の主体である会社組織もできた。しかし、事業開始と同時に、乳製品の輸入に伴う外圧によって、牛乳の生産調整が始まり、１００頭規模での搾乳計画が80頭からさらに60頭まで制限され、生産量が大幅に減り、経営資金のやりくりがうまくいかず、借金は増える一方であった。役場に就職していた牧野は，この時、力量を認められて産業振興課長に就任、当時の農業協同組合長から、酪農家の経営建て直しを要望された。課長としての仕事始めは、酪農負債整理対策であった。石狩支庁をはじめ北海道庁など関係機関に何度も足を運び、低利な資金の手立てに紛争するが、すでに経営の立て直しは困難を極めていた。会社は草地を手離すことになった。

平成４年、この地に北海道拓殖銀行が資金を出して民間がゴルフ場にする計画となった。この頃、オイルショクで多くの銀行が破綻し、北海道拓殖銀行も破綻した。牧野は厚田の将来のことを思い、厚田村の復活と繁栄はまず、昔のように厚田の海で魚が豊富に穫れ、海が豊かになることを考えていた。そのために、漁師の頃を思い出し、別狩、小谷、青島に広がる丘陵地の原生林を戻すことを考えた。幸いこの地区の日本海には今でも細々と藻場が残っていた。しかし、現実は林を少しずつ切っている間に、魚や昆布が徐々に獲れなくなっていった。

牧野は役場の職員を辞めて、平成８年５月に行われる厚田村長選挙に出馬表明した。対抗馬は厚田村の前助役小林秋雄であった。牧野は別狩、小谷、青島に広がる土地を村有地に買い戻す。その際、木を植えて海を豊かにして、後世へ豊かな自然を贈り物にすることを公約とした。村の人々の賛成を得て当選した。牧野は別狩、小谷、青島に広がる土地を安定した林にするために厚田村長選挙に３回立候補し、いずれも当選した。

平成16年４月の村議会で２００ha の用地を厚田村が取得することを提案した。その提案について、用地取得への反対者は「財政がきびしい時、無駄なことをするな」との意見を述べた。

しかし、牧野村長は、「この地の開発に伴い厚田はさらなる開発につながる。海岸の自然や山の水源涵養林としての機能、魚付林を確保する必要がある。自然に返して林として残すことは、厚田の将来に良いだろう。」と説明した。２００ha の用地には、菊池の沢川、石沢の沢川など多くの沢が日本海へ流れ込んでいる。この沢が流れ込むところは魚がよく獲れた。豊かな漁場は山からの水によるものであり、大切にしなければならないと思っていた。

最後に、「厚田の海の魚も減少してきた。厚田の農業、漁業にはきれいな水と豊富な水量が必要である。また、第１次産業の果たす役割は大きい。２００ha の用地は厚田村が取得して山林として保存する」と答弁し理解を求めた。そして平成16年、厚田村として「あつたふるさとの森」整備計画が策定され、２００ha の用地を厚田村が取得することとなった。

厚田村は平成17年10月に石狩市と合併し、森の再生は石狩市へ移行された。石狩市の施策名称は「あつたふるさとの森」である。担当は石狩市建設水道部建設指導課都市計画担当課長・魚つき森プロジェクト担当課長清水雅季である。「魚つき森」

という文言が行政に使われている。このことから、「あつたふるさとの森」の施策の重要性が明示された。持続可能な森にするために、森づくりは市民ワークショップによるものとし、「あつたふるさとの森」は着実に進められる。

平成23年3月8日石狩市役所において、厚田地区の伊藤一治石狩市議会議員の紹介により、私は石狩市田岡克介市長へ「厚田のニシン復活のための環境づくり」について懇談会を行った。

内容は、1なぜ、海を豊かにするために、山に木を植えるか　2厚田川の特色　3厚田地区の地質　4海のプランクトンを増やす方法などである。そして、田岡市長から「ニシンの泳ぐ森」という森の計画ネーミングをいただいた。市長は厚田のニシン復活のための環境づくりとして山に木を植えることに関心を寄せてくれた。

平成25年度「取組方針検討会」で市民ワークショップの一環として地域住民、団体、森林ボランティアが「森づくりの方針」を策定した。

これを受けて、市は「あつたふるさとの森」の理念として「厚田区のシンボルとなる杜」、「ニシンの群来を導く杜」、「都市住民との交流の杜」に決定する。

具体的には、「あつたふるさとの森」づくりは、市民協働で取り組むことで、自分たちの森として大切にする。そのために菊池の沢川に沿って「魚つきの森ゾーン」、中島北の沢川の上流部に「水辺ビオトープ」を造る。

市が先頭に立ち、森づくりに意見交換を繰り返し行ってきた。これらの内容を受けて「あつたふるさとの森」の事業実施に向けて市から構想図が示された。構想図について意見交換を行う。意見交換の主なものは、「森づくりの期間を決めておいた方が協力は得られやすい」、「タイムスケジュールの作成」、「広い土地に植樹を担当する団体を決める」などである。

「あつたふるさとの森」に植える苗木の提供はニトリが行っている。そして、北海道石狩振興局、石狩湾漁業協同組合、石狩市、あつたの森支援の会「やまどり」、厚田小学校、厚田中学校、石狩市子ども会育成連絡協議会が植樹に参加し、「あつたふるさとの森」の植樹は順調に進められてきた。

ニシンの生息環境も次第に整い、厚田の海に群来（くき、ニシンは産卵期になると、ホンダワラなどの海草が豊富な浅い浜辺に集まり、メスが卵を産み付けてオスが放精します。この産卵行動で海面が白濁すること）も見られるようになった。2度とニシンが獲れなくなることを繰り返さないために石狩市民、地域住民、団体、森林ボランティアはもとより、北海道の人々、日本および世界の人々が「あつたふるさとの森」の植樹に参加する。ニシンの生息する環境を維持することは人の責任である。そうすることがやがて、私たちの暮らしを支えることになる。

今の厚田について牧野さんは

・ニシンが獲れるようになった。
・藻場が繁殖してきている。魚の種類も多い。「あつた港朝市」も軌道にのってきた。
・ホタテの養殖事業も軌道にのってきた。
・鮭、昆布も順調に獲れている。

などの感想を述べている。（平成28年6月24日牧野さんの自宅）

これからの厚田へのお願いについて

・自然の資源を大切にした海の世界を作る。そのためには、私たちの仕事として環境保全に努める。
・厚田は札幌に近い。農業、水産物を大事にして札幌市民の食料を支える。
・厚田の人たちへ自然を大事にして、派手でなく安心した生活を望む。

などを話していた。（平成28年6月24日牧野さんの自宅）

私は取材を通して、牧野健一氏は、

・地域の課題に耳を傾け、地域のことをよく知っている。
・判断力、口調がよく、話す内容が理解されやすい。
・聡明な頭脳、組織の中で、計画や策略を立てる。
・課題を解決する的のよい先見性が優れている。地域の信頼がある。

などに優れている人物であることを強く感じた。

2016年度上半期

和名倉山森づくり報告

和名倉山森づくり事業担当　高岡正彦

和名倉山は、64年(昭和39年)と69年(昭和44年)に山火事が発生し、多くの樹木が焼失しました。その跡には成長の速いカラマツを植林するなど、森の復興が図られました。同時期、林業の衰退で山での仕事も少なくなり往来が激減し、多くのルートが2m以上のスズタケで覆われ藪の山となってしまいました。

そのような和名倉山を以前のような水を育む山に復元するために、97年埼玉大学ワンダーフォーゲル部OB会が活動を始めました。その後、NPO法人百年の森づくりの会として事業を拡大しています。00年までに失われた道の復元を行ない、01年には樹木の生長が遅いところに、和名倉山の在来種であるブナの苗を植林し始めました。植林を始めると、鹿による食害に悩まされ、植林よりも、現有樹木を守るほうが先と考えました。現在は現有樹木に鹿よけネット巻く作業が主になっています。03年には旧大滝村村有林の管理小屋だった仁田小屋を改修しこの事業のベースキャンプとしています。この小屋は会員の力でログハウス風に作り上げました。

(なお、和名倉山は山頂が県界でない山々における埼玉県の最高峰です。ご存じだったでしょうか？)

2016年度下半期

10月24・25日　第37回 植林ワーク
(仁田小屋整備・植林地鹿よけネット修理回収)

5月28・25日　第38回植林ワーク

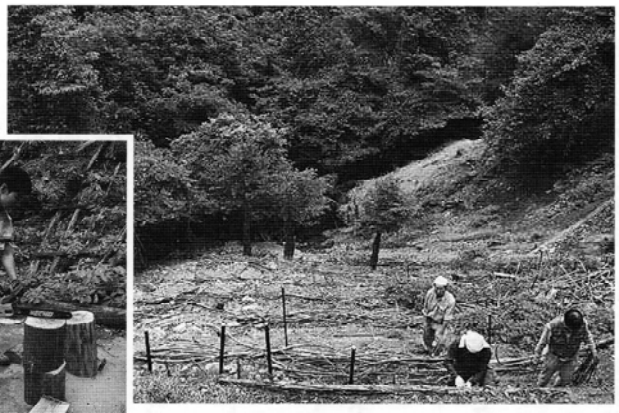
今回のワーク(和名倉山での一連の作業のことをワークと呼んでいる)では前回に引き続き「仁田小屋整備」と「鹿よけネットの修理」を行なった。

参加メンバーと西武秩父で合流して、三峰にある旧大滝小学校三峰分校へ行き、資材を積み込んだ。この場所は、09年からお借りしている施設である。百年の森づくりの会の資材を管理するとともに、高校体育連盟登山専門部による雲取山方面への自然観察の拠点として大いに活用させてもらっている。車は和名倉山の東(雲取林道～大洞林道)を行き、鮫沢橋まで入ってから、その後は徒歩で和名倉山の南へ回り込む、この林道は上部からの落石が多く、その都度整備されているが、とても危険なので鮫沢橋以降は徒歩で入山することにしている。林道をつめ、荒沢の出合を過ぎて傾斜がきつくなり始めたあたりにカモシカの骨が横たわっていた。頭が12.3cmくらいで子供のようである。この辺りは鹿も多いが、カモシカもよく見かける。岩場から落ちて動けなくなったところを他の動物に襲われたようでほぼ骨だけになっている。登山道入り口までの道には小さな崩落個所はあるが、前回(半年前)と大きく変わっていない。登山道は足場が崩れやすい、1年間で50人も歩かないだろう道は安定するはずがない、さらに最近の秩父地域の雨の降り方が異常で、降るときは大雨・そして強風を伴うことが多い。

初日の「仁田小屋整備」では、まず小屋下の斜面の土砂が流失し始めている箇所の整備を行なった。単管パイプを打ち込みそれに間伐材を渡し、土止めにしている。植物が定着し始めたことから、効果が出てきたと思われる。依然仮植え植樹したブナも根付いている。今後、流失が激しい、小屋から離れた個所及び下部にも同様な手法で処置することを考えている。また、小屋の上部も浸食が始まっている。こちらも手を加えなければならない。過度に人工物を投入することは避けたいが、この自然と共生するには最低限の整備は必要であると考えている。

今回は高校生(1年生)5人を含めて12名の参加だった。逞しく、頼もしくなった3年生の参加が得られなかったが、新たな若い力が加わった。

入山時はパイプ・ポールの荷揚げ、小屋に着いてからは、斜面の整備の手伝い、間伐倒木材の処理、薪割りと、これまでに経験したことのないこと、今後もまず経験しないことの連続である。ワークの作業の意味・価値も重要だが、このような作業を若い高校生経験していることの意味・価値は同様に重要である。



2日目は仁田小屋の頭1555付近の植林地の整備を行なった。雪、倒木で倒れてしまった鹿よけネットをひとまず回収した。植林した樹木を鹿等から守るために張ったネットであるが、細かい目のネットを使用したせいか大雪に弱く、一年も持たなかったところもある。今は、植林地を大きく囲むのではなく、一本一本ネットを巻いている。

今後の和名倉植林ワークで、現在長瀞の畑に仮植えしてある200本のブナを植林することを考えている。すでに2mほどに成長しているが、ブナは多少切り詰めしても条件が良ければ活着し、成長には問題ない。問題は、元々ブナは降雪地域の標高1000～1500mに生育する樹木なのでできるだけ早くその環境に戻さなければならないということである。次回のワーク（10月22・23日）ではその植林地の整備（仮植えになるかもしれないが）を考えている。

4月29・30日　ナシ尾根偵察

ワークの1か月前に有志を募って、偵察した。入山時には、ポールなど資材の荷揚げを行なった。偵察の最大の目的は、和名倉山と将監峠の中間値の山桜を確認することだった。ちょうど東仙波山付近なのだが、依然同じような季節に通りすがり、みごとに満開の山桜を見られたことがある。結果的には時間切れで確認することはできなかった。そしてもう一つの目的であるナシ尾根の偵察のために引き返すことにした。仁田小屋尾根とナシ尾根の分岐は倒木が激しく尾根上を歩けない。ナシ尾根のすぐ南を巻きながら下山していく。微かに踏み跡があるのだが、それらは獣道として残されているものである。方位を間違えるとすぐに道を失う危険がある。これまで3度ほど歩きやすさで選んだ踏み跡を歩き続け、最終的に方位を修正できなくなり道を失ったことがある。今回は、ほぼ最適ルートで下山することができた。和名倉山頂から4時間で下山。まだ紹介することができないほどルートファインディングが難しいコースである。しかし、山頂への最短コースに成りうるので、今後も偵察を続けたいと思っている。

2016年8月21日(日)

長瀞町宝登山下刈り活動報告

長瀞宝登山百年の森は、2007年10月に苗木が植栽されて今年で、9年が過ぎました。今年は、植栽地のうち苗木が枯れて少なくなった場所に再度苗木を植えることとして、4月3日にヤマツツジ60本、ミツバツツジ100本を会員21人で植えました。さらに、6月18日にこの苗木を植えた場所の下草刈りを行いました。

そして、今年の夏の下草刈りは、今年で9回目の草刈りになりました。今回は、8月21日（日）に、毎年参加いただいています三井住友海上火災保険株式会社埼玉支店から64名、百年の森づくりの会から15名の合計79名で行う予定でした。

しかしながら、今年は天気が不順で、天気が変わりやすく前日の夕方の天気予報が21日の長瀞町の天気が雨と予報されました。そのため、21日の活動は三井住友海上火災保険株式会社埼玉支店の皆さんの参加は中止することとし、会員だけで多少の雨ならば実施することにしました。

ところが、21日に長瀞に行ったところ、見事に天気予報が外れ、良い天気になっていました。そのため、集まった会員14名で下刈りを行いました。

良く晴れ、今年も暑い下刈りになりました。人数も少ないことから今年の春に植えたツツジの周りの草刈りを中心に行いました。9時30分から始め、11時30分までに概ねの作業を終えることができました。蜂に刺されるのを心配しましたが、事故や怪我も無く、作業を無事に終わらすことが出来ました。来年は、また三井住友海上火災保険株式会社埼玉支店の皆さんに参加いただき、気持ちのいい汗を流していただきたいと思っております。

参加された皆さんには、本当にご苦労様でした。

（事務局）

28年4月3日
▼ツツジ植栽

平成28年度第9回通常総会開催

NPO法人百年の森づくりの会の平成28年度第9回通常総会が、6月5日（日）埼玉教育会館会議室において開催されました。

当日は、平成27年度事業報告・収支決算案、平成28年度事業計画・収支予算案を審議いただき満場一致で原案通り承認されました。

総会終了後、「秩父の自然を知ろう～秩父山地とニホンオオカミ～」と題して、野外調査研究所理事長の吉川國男氏による記念講演会を開催しました。

秩父の険しい地形の成り立ちから、秩父にも生息していたニホンオオカミについて有意義なお話を伺うことが出来、成功裡のうちに終了することができました。

（講演録は別途記載）

総　会

総会・記念講演会

28年 春の植栽

■新会員（会員番号 氏名 住所）2016.4～

967 荒木 幸治　さいたま市 ／ 968 吉川 國男　桶川市

和名倉百年の森　第32号 2016年10月 1 日発行

発行者：NPO法人百年の森づくりの会　小林公彦

NPO法人百年の森づくりの会 事務局

〒330-0055 さいたま市浦和区東高砂町11-1コムナーレ９階

さいたま市市民活動サポートセンター内　メールボックスA-71

TEL/FAX：0480-22-3131

http：//www.100nen-forest.org　　e-mail：info@100nen-forest.org